

# イラクのアバーヤについて

## — 民族服飾の形態

古 元 千 鶴 子

### I. 緒 言

19世紀末ドイツの地理学者リヒトホーフェンによって、西アジア・中央アジアを経て中国にまでのびる交易路に対して、ザイデンシュトラセン（絹の道）という語が初めて使われ、のちにイギリスのスタインが、シルクロードと命名した。わが国における中近東への関心は、ひとところに比べると、かなり高くなっているが、まだ西欧志向は文明開化以来今日に至るまで、日本人の思考、心情に定着してなじみが薄い。謎とロマンを秘める古代シルクロードにとっては、民族服飾研究を志している者には、ひとつの夢があり魅力を与えられている。しかしイラクの社会、文化、服飾に関心をもつ人は割合に少ない。本報ではイスラム圏にみられる一民族服飾の形態であるイラクのアバーヤについて研究を行ったので報告する。

### II. 研究の目的と方法

イラクの民族服飾であるアバーヤの被服構成および技法の研究は、私の知る限り解明されていないので、それらを明らかにすることを目的とした。調査方法は、

1. イラク民族の生活背景を理解するため、イラク国の概要を文献により調べた。
2. イラクに長期滞在した学識者より資料の提供を受けた。
3. イラク・バクダードの居住者より、アバーヤ、

チャラガット、フータを資料として入手した。

4. アバーヤの形態と、その構成および縫製技術と着装の実態を考察した。

### III. イラクの概要

1. 〔イラク〕 西アジアに位置する共和国である。北はトルコ、東はイラン、南はクエートとサウジアラビア、さらに西はヨルダンとシリアに接し、東南はペルシア湾に臨んでいる。ユーフラテス川の河谷の西縁は、ところにより険しい断崖（アラビア語でイラク Iraq）となっており、国名はこれに由来するといわれる。面積 438,446  $km^2$ 、人口は 9,465,800 人（1970 年）、人口密度 21 人/ $km^2$ 。旧トルコ帝国のバスラ、バクダード、モスールの 3 州が第 1 次世界大戦後独立したもので、首都はバクダードである。アラブの伝統に基づく民主社会主義国家であり、国花はバラである。

2. 〔自然〕 砂漠性乾燥の気候で高温低湿であり気温の変化が激しい。5 月から 10 月までが乾季で強烈な暑さの夏となる。7、8 月の平均気温 35℃で、日中気温は 43～49℃となり、月 5 回位の強風は砂嵐を巻き起し、12 月から 3 月までが比較的涼しく、やや湿潤、寒冷な冬となる。降雨量は少ない。雨量は東から北にかけて多く、南西部に従って少くなり、国土の大部分は不毛の砂漠である。バクダードの気候表は（表 1.）の通りである。

表 1. 気候表 バクダード（33° 20' N：44° 24' E 標高 34 m）

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
気 温 (°C)	10.1	12.2	15.6	21.8	27.9	32.1	34.3	34.1	30.4	25.0	17.5	11.5	22.7
降 水 量 (mm)	26	28	28	17	7	0	0	0	0	3	21	26	156

（理科年表 1970 による）

3. 〔住民〕 古来ヨーロッパ、アジアを結ぶ商業の中心地として栄え民族の交流が著しかったが、今日は人口の 80% はアラビア人であり、アラビア語を公用語とし、イスラム教を国教とする。イラク人口の 18%

を占めるクルド族は、北東部クルディスタン地方に約 100 万人居住する。クルド人は民族意識が強く民族自治を要求し、一地域に統合することを目標とし、クルド地域の学校にはクルド語を使用させている。イスラ

ム教は総人口の95%におよび、シーア派とスンニー派（正統派）と二分される。スンニー派は部族の長、政治家など政治の実態を維持し、バグダードやバスラの市民に多く、シーア派はその聖地カルバラ周辺のアラブ人とイラン人である。人口の大部分はティグリス、ユーフラテス河畔に居住し人口密度が高く、バグダード、バスラ、モスル、キルクークの主要都市に集中し、全労働人口の80%は農業人口で、若干の遊牧民が砂漠と草原に居住している。アラビア人の生活様式風俗は、部族、階層によりかなりの差異があり、都市住民、農耕民、遊牧民の間に著しく現われている。アラビア人は風土的には「砂漠の人間」と定義され、性格的に乾燥した思考、実際的な観察と判断、強烈な道徳的傾向をもち、卓越した商才とともに団結に富み、意志強固で戦闘的とされているが、穏健であり、着実、慎重であるといわれている。1958年革命後教育に意を用い、文盲一掃に力をいれ最近では年令を越えて小学校に入学させ教育に当り、初等教育は6～12才の義務教育となり（約5,100）中学校840、1958年バグダード大学設立の外、イスラム教のヒクマ大学など7大学がある。

4.〔歴史・政治〕メソポタミア地方は、世界最古の文明の発祥地であり、土地が肥沃で東西交通の要地であるため、古来幾多の民族に侵入され西アジアの中心部となった。前3000年代シュメール族が住み、都市文化を形成後、バビロニア王国、新バビロニア王国が成立し、ペルシア帝国、マケドニア王国の支配を経て、7世紀にはイスラム教徒の征服、1638年からはオスマントルコの支配を受けた。第1次大戦後は、イギリスの委任統治領となる。その後ファイサルが国王に選ばれイラク王国が成立し、王制は1921年から58年まで続き、その間はイラク国の形成期として発展し、1932年立憲君主制の独立国となる。第2次大戦中は連合国側に加わり、1955年バグダード条約に参加したが、59年同機構を脱退し中立政策をとっている。1953年国王ファイサル2世は、英国留学より帰国以来58年の間、国内外ともよき治世をなし親英政策を続けたが、同年7月軍事クーデタで倒され革命を導いたカセム将軍、アレフ大佐を指導者とする共和国が発足した。カセム政権は軍部の反乱、クルド族との対立、石油利権で1963年軍事クーデタで倒された。アレフ大統領時代の、親西欧派、親ソ連邦派との対立、クルド族の自治運動、反乱、政情不安が続き、68年7月クーデタで追放後、同年9月暫定憲法公布し、クルド族の自治権を認め内政安定化につとめ翌年7月一部

改正今日に至る。英、米、西独より、ソ連、東ヨーロッパ諸国、中国との関係が密接であるが、知識階級の人々は西欧諸国に志向し、西欧との接近をはかっている。外交政策は、非同盟主義と植民地主義反対を基調とし、アラブの統一を目標としている。

5.〔経済・産業〕石油の採掘と農業に依存し、イラクの国民所得は1人当たり推定261ドル（1969年）で、西アジア諸国では低く、物価は統制されている。農業立国のイラクは、農業開発のため農地の改革、洪水の防御、貯水湖、ダム建設、灌漑排水が進められ、主に小麦、大麦、米、綿花等を産し牧畜（羊毛）がこれに次ぐ。棗椰子は特産で、その輸出量は世界取引量80%を占め、棗椰子はイラクの風物詩でもあり、捨て去ることなく利用される貴重な木である。石油の埋蔵量は6億6850tといわれ、全地域の開発採油権が、イラク石油会社（IPC、英、米、仏、オランダ資本）にゆだねられていた。イラク政府が得た石油利権料は主要な財源で、1969年総収入の70%が石油収入となっている。外国石油会社への依存を脱却するための努力を続け、国有イラク石油会社（INOC）を設立、未採掘地区の開発を進めている。工業は発達が立ち遅れ、セメント、石綿、巻煙草は国有化され、石油化学、レーヨン、化学肥料、機械等の工場は、外国借款や技術援助により計画建設中である。

6.〔貿易・日本との関係〕主な貿易の相手国は、英、米、西独、日本、伊、仏、ソ連邦であり、1963年外国商社の活動再開された。主要輸出品は石油、棗椰子、セメント、皮革がこれに次ぎ、輸入品は機械、鉄材、自動車、電気製品、薬品である。1964年日本、イラクの貿易協定調印され、輸入の93%は原油であり、輸出は自動車、電気製品、綿織物等である。両国関係はイラク政府の開発計画へ日本の技術、経済援助など幅広く緊密化することを期待されている。

7.〔バグダードの概況〕イラク共和国の首都。人口2,183,760人（1970年）、主都圏の人口2,696,000人に達する。紀元762年、アッバス朝のサラセン帝国第2代カリフ・アル・マンスールにより建設が始められた。サラセン帝国隆盛時代の栄光を表わすバグダード中心の物語、アラビアンナイトに集められた名高い平安の都である。しかしアラビアのロレンスは知らないという。バグダードは長い間の支配者の交代による沈滞の後、英国の委任統治またイラク王国時代ファイサル2世の親英的政策のえにしか、ヨーロッパ文化の急速な流入で表面的には近代の色彩をもつ都市となり、第二次世界大戦後イラク石油の収入増大し、新しい富は主都に反映され経済開発と相俟って、バク

ダードの商工業が発達した。交通はよく発達し、ヨーロッパに接続する国際鉄道の要点であり、古い隊商路も舗装され、中近東を通る国際航空路の中継地である。メソポタミアに興乏した代々の古都として史跡に富み、イラク国立博物館、ミルジアン回教寺院、アバシッド宮、アラブ芸術博物館、アブドル・カディール・アル・ガイラニ・モスクなど多くある。

都市以外の地域では、差があり日乾し粘土練瓦づくりの椰子の葉でふいた家屋に絨毯を敷き、水道も電気もまだない素朴な生活といわれている。以上のような環境のなかに定着している背景の民族服飾のアーバーヤである。

#### IV. アバーヤの構成について

##### 1. 呼 称

イスラム文化圏のあらゆる国々に住む人びとに見られるイスラム教徒の婦人の全身隠蔽の姿は、イスラム教の掟に従う服装とされている。イラクの民族服飾は、顔面は出し全身を包被する真黒なガウン型式のものであり、これをイラクではアーバーヤと呼んでいる。(写真1.) 伝統を重んじる婦人は、チャラガット(写真4., 図6.)とフータ(写真8., 図7.)を頭部にまとい、アーバーヤを着装する。

##### 2. 形 態

イスラム教徒の女性の慣用する、特異な全身包纏の服飾は伝播した民族や国家によって、その方式が異なっていることが認められている。アーバーヤは、前開型の中央を頭からかぶり、顔面だけ現わし全身を足もとまで包み、両手で前を包む姿であったり、手ばなしであったり、前をおはしより姿で着用する(写真2.)裾の広い、ゆるやかな黒い寛衣である。

##### 3. アバーヤの特徴と生活素描<sup>3) 4) 5) 11) 12)</sup>

(1) 女性隔離の全身包被の服装である。

イスラム教徒の生活のうちには、私達にとっては不思議なと感じるような問題が多くみられる。アーバーヤにも影響された宗教性の深さ、イスラム教の戒律とイスラム教徒の生活素描を述べると、次のことがあげられる。

###### 1) イスラム教の戒律

イスラム教は、7世紀のはじめ唯一神アッラーの啓示をうけ予言者マホメットにより創始された。イスラームの教理はアラビア語でアル・イスラーム (al-Islām) と呼ばれている。このイスラームとは「平

和であること」また「絶対に帰依すること」を意味する。アジア、アフリカに数億の信者がいるが特に中近東に不動の位置を占め、過去1300年間にわたって重大な影響を及ぼしている。イスラム教徒等の政治、経済、法律、社会、宗教、科学、芸術、風俗、習慣その他の生活のあらゆる面のよりどころとなる規定を含んでいるものと考えられる。教祖マホメットは、早くから両親を失い孤児となり、人生の辛酸をなめつくしたと云われる。温和で人を愛し、同情心に富み寛大で真面目なる大人物であり、当時アラビアの社会では、部族間の反目と流血の抗争と孤児、寡婦、老人、病人、奴隷の売買、市民とベドウィン族との貧富の差、貴族階級の富等経済的社会的に不安が激化していたが、マホメットは階級差、民族の差別なく、慈愛と全く平等の「教友愛」で民衆に接し、多くの人の心に救世主として求められ、異国の他民族までイスラム教が普及した原因の一つでもあったのであろう。アッラーの教理「帰依」の形でアラブの民族的統一を可能にしたと考えられる。イスラム教徒間のお互いの挨拶に「貴女の上に平和がありますように」という意味の言葉を使用する。イスラームの教えが人々を導く窮極の目的は「平和の宿」であり、イスラームこそ「平和の宗教」であると述べられ服飾の同一がみられる。

###### 2) 女性隔離の習慣

女性隔離の習慣は、イスラム世界の全域にわたって行われているのでなく、一種の珍しい風習として、イスラムの特徴のように伝えられている。女性隔離の習慣であるが、その根拠となると考えられるコーランの二四章三一節に「女子の信仰者は、その夫および身内の男子以外の男性には顔や姿を見せはけない。慎しみぶかく目を下げて、外部に出ている部分はしかたがないが、そのほかの美しいところは人に見せぬよう。胸には蔽いをかぶせるよう。……」にと掟に書かれている。しかしコーランは女性が顔面を含む身体の大部分を外被で蔽い隠すことは命じていない。コーラン二四章三〇節に「男子の信仰者は慎しみぶかく目を下げて性器を大事にしておくように。……」と女性とともに、慎しみ深く行動するように二聖句にあるのだが、女性隔離の習慣と直接関係のあるコーランの聖句は、二四章三一節の中ほど以下の部分にある。イスラムの社会では、女性は男性たちから自分自身を遮蔽するということであり、住生活にも適用され、家庭内においても血族以外の男性の出入りを禁じた婦人部屋の制度がある。外出時には、頭部、顔、頸、胸、手等を外被により蔽い隠すということになった。厳格



写真1. 袖口が見えるアバーヤ姿

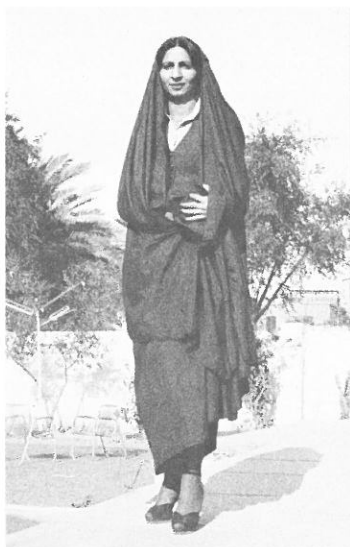


写真2. アバーヤのおはしより姿

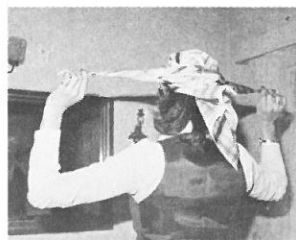


写真3. チャラガット 後



写真4. チャラガット 前



写真5. フータ



写真6. フータ



写真7. フータ



写真8. フータ



写真9. アバーヤ 着用



写真10. チャラガット・フータ・  
アバーヤ着装

古元千鶴子 所蔵

な宗教戒律は身体の肌を隠すように女性に求めているが、顔を隠せとは言っていない。しかし一部の国では顔を覆面する風習も多い。女性隔離の姿態、隠蔽の風教はイスラム教の宗派により地域や民族により、また為政者や教義にもよって服装の隠蔽の程度が異ってくる。この服装の習慣もエジプトは1920年、トルコは1926年、イランは1936年国法により禁止されたこともある。暑熱乾燥の地域住民の身体保護と包身の衣服の機能さには、伝統保持のイスラム教の反対もあり早急には実現しがたい傾向にあるといえる。女性隔離の習慣は、女性の自由を束縛する時代おくれのように見えるが、この制度は女性を保護する目的として考えられたとも言う。山岳地帯で暮らすペドウイン族の生活者には、拉致される場合もあり、女性隔離も必要とした。またイスラム圏の女性は伝統的に社会、経済の両面で無能者扱いをし、裕福な家庭でも女性に読み書きは教えなかったし、男尊女卑の著しい部族もあるという。女性隔離の生活の、慎しみ深さは尊敬される家族の条件としたし、女性は男性への従属だけでなく、家族の名誉や女性らしい慎ましやかさを信念としている。女性は自分の夫以外の男性の接触を許さず、女性の死後でさえ、他の男性との接触を禁じられている。埋葬は土葬であるが、女性たちの墓には男性は立入れない。

### 3) 婦人部屋

ハレムという名称は、女性隔離の習慣と関係のある言葉であって、家の造りにも影響を及ぼしている。ハレムはハラムの訛りで、ハレムとは、アラビア語で「神聖にして犯すべからざる場所」といわれる。イスラム教徒にとって、妻やその他の女性の居住部屋には、全く外部の男性が近づき犯してはならない場所である。女性たちを一部屋に集め、外来男性から隔離するため泥作り日干し煉瓦の家屋も隔壁を設け、窓も中庭に面して開き、道路側に面した所はあけないという。棗椰子の小屋や山羊の毛で織った真黒なテントの居住でも、各自固有の女性の部屋をもっている。チャイハナ（茶店）にも男女の別がある。

### 4) 一夫多妻主義

経済的理由から、一夫多妻主義はイスラム世界全体に実施されていないにも拘わらず、イスラム教徒が何故と、非難すべき社会制度のように考えられている。一夫多妻婚は全世界の諸民族の中で、むしろこれが普通であって、人数を制限したのがイスラムの教えからきたものといえるのではないだろうか。イスラム教信者の多くは、経済的能力から一夫多妻婚の実施は困難

で、大部分が事実上一夫一婦主義を行なっている。しかし一夫多妻制度が完全に廃止されてはいない。一夫多妻制度の根拠は、コーラン四章三節に「自分だけ孤児によくしてやれないと思ったなら、誰か気に入った女性をめとるのがよい。2人なり3人なり4人なり。だがもし妻が多くては公平に出来ないならば1人だけにしておくか、そうでなければお前たちの右手が所有している所以我慢するように……」と述べている。句中「お前たちの右手が所有しているもの」とは奴隷女性を意味し、聖典中よく現れてくる。この句に語られているのは条件付の一夫多妻制のよりどころとなす規定と考えられる。イスラム教の聖戦でイスラム教徒の男性が倒れ、犠牲者の残した妻や孤児の養育という社会問題処理のため啓示されたためで、4人迄の妻帯することが許された。奴隷との正式結婚は認めていないが妾としておくことは出来たといわれる。4人の妻を公平に平等に取扱うことは普通人に不可能なことで、句中平等公平に出来ないならば1人にこしたことはないが但書がついている。預言者没後対外発展のため、アラビア人の人口増加を緊急と考え一夫多妻婚を持続させた理由もあり、農耕民族の生産力の低さと家族の富の増大が村内でのスーラスの向上につながるとすれば、経済的な視点から労働力の補強という意味もあるようだ。妻4人いるとお互いに嫉妬しないのかと尋ねると、主人はよい男性で、能力があると誇り、平然としているのだが、古い妻は、家庭内では実権をにぎっているといわれ、経済的に衣類の所持数も少なく、ボロかくしにも全身包被が役立つともいえる。アバーヤは以上のような宗教的な掟と習慣をもつ伝統的な服飾である。

### (2) 身体保護の防暑着である。

砂漠性乾燥の風土に対応するため、強い日射を遮り、また人体の水分蒸発を抑え砂塵防護のため、積極的に頭の先から足もと迄、全身をすっぽり包む服装が常習され定型した砂漠民族服飾である。イラクでは酷暑の14時～16時まで外出せず休養、昼寝の時間である。

### (3) 身体装飾文身（入墨）について

民族服飾の起源をたどると身体装飾、皮膚の採色は、儀式や行事、信仰する祈願の表示、性別、成人や既婚者の区別の目的で裸装することが多い。イラクでは割礼、婚礼の儀礼や病後等に入墨をする。主に顔面、手の甲、手首、背中などの上半身が多い。顔は女性に多く、男性は左手の甲が多い。顔は点にしているのが多く、男女同じようでも対称的である。(図1.) 全てがこの通りということではなく儀礼とか病後にするため多

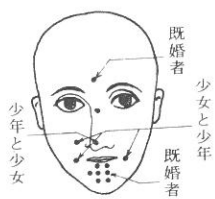


図1. 入墨

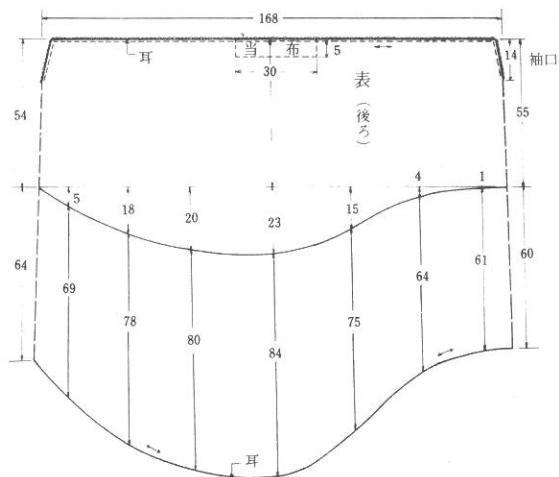


図3. アバーヤ (後ろ)

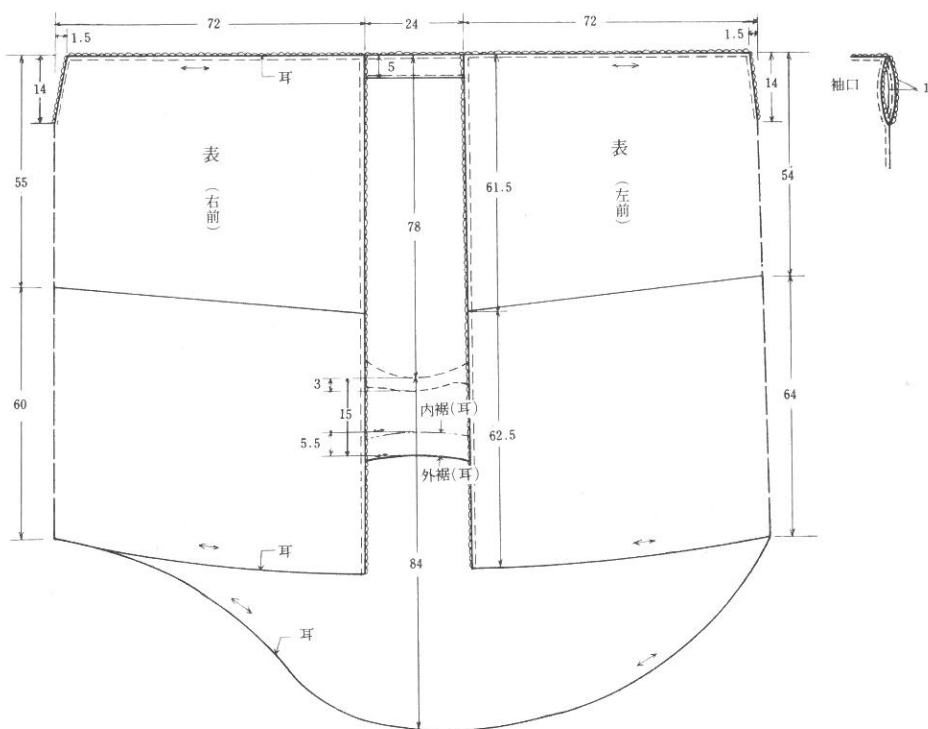


図2. アバーヤ (前)

アバーヤの構成原図 そのⅠ





少変る。入墨は低文化に共通にして単純幼稚であるが、神秘的に根強い習俗がある。若い人には少ない。一時的な扮飾として、病後、婚礼の祝に参加する女性は両手の掌にヘンナで染める。薄くするのが美的であり一ヶ月位で消えてしまう。マニキュアもヘンナでされる。ヘンナは中東の一般的な染料である。イラクの婦人は目の淵に、コール粉という香りのよい樹脂でやいて作られた煤を塗るアイ・シャドーは、古代の化粧法そのままで、一般に鼻筋を通り大きな扁桃状の目と長いまつげの顔面を、のぞかせるアバーヤ姿の美しさは格別であるという。

#### 4. アバーヤと drapery について

エジプト、メソポタミヤ、ギリシア、ローマの古代衣服に見られる drapery は、無縫衣で1枚の布を身体に巻衣したり、布を垂れかける、掛布とする、垂簾をするなどの着装が主体で、アフリカ、西アジア、インドなどの亜熱帯地域に多く見られ、南方系衣服の一特色となっている。身体各部分に裁断し縫合した現在の洋服を tunic 系の衣服とか、北方系の衣服と呼ばれている。織布を人体にまとい衣服を形成する着装は分離すると再び織布に還元してしまう。この drapery が歴史の進展につれて影をひそめ一部宗教服や、イスラム文化圏のみに足跡をとどめたのは、中世以降における西欧文明の近代化は、drapery から北方系裁縫衣へと変えてゆく過程を示してきた。今日の服装の中で drapery が温存されているとすると、それはなんらかの事情において、かたくなに残されている分野に限られている。最も保守的な宗教服や、それを直結している一部の儀礼服、あるいはキリスト教の修道服やベールをかぶる wedding dress、ビルマやチベットなどに見られる僧服など、また一方 drapery の要素を持つ民族服飾はいずれもイスラム文化血縁のある地域や民族にかかわりあることが理解される。コーランに始まるとされるアバーヤも遠く淵源はバビロニアやアッシリアまで、さかのぼることができ、古代衣服の drapery を、今日のアバーヤに残存させた平面的な織布を裁断箇所を最少限にし、直線的に肩と腰布部のみの縫合で、自然にできた布のたるみが身体の動作につれて変化する優美な着装法を現在アバーヤにとどめた drapery は誠に興味深いことである。

#### 5. アバーヤの構成

(1) 縫製…バクダードで布地を購入し、現地の母親に依頼して縫製した夏季用の外被である。

#### (2) 素材・要尺

1) アバーヤの材質は、レーヨン平織の黒無地の厚地で、どしりとたれ下がる感じのもので接触冷感を与える。重量 1.4 kg、要尺 100 cm 幅で長さ 660 cm 内外である。

2) チャラガットの布地はレーヨンフィラメントで、朱子織の黒無地であり、両端には lily yarn の縁飾りがついている。(図 6.)

3) フータの材質はレーヨンフィラメントで、黒無地の楊柳クレープである(図 7.)

4) 縁飾糸は、レーヨンフィラメントの黒糸でS撚の双子である。

(3) 採寸…アバーヤの丈は、頭上から床は、棲先が少し見える程度を標準とする。アバーヤの丈は採寸したのではなく、縫製した母親は自分の体と比較しての目算であり、着装者 157 cm の身長にあわせている。

#### (4) 構成

1) アバーヤを前面から見たのが(図 2.)である。一部裁縫衣であり、解体すると平面的な織物布に還元され、着装に際して身体之余剰部は優美な drape が流れる。布は緯布づかいであるが、袖口、肩、前開きの擦れやすい所には、黒のチエン、ステッチ風の洋角<sup>10)</sup> 0.4 cm コードで縁飾りを細かく、まつり縫いで綴じつけてある。後衿剣には当布をつけ、アバーヤの布の重さとし力のかかる箇所は補強され、裾は耳のままである。袖口があることが特異とされる。

2) アバーヤを後ろから見たのが(図 3.)である。直線裁を腰回り縫合線でカーブをつけ変形された、アンシンメトリカル・バランスを保持させている。創作するのに容易なカーブではないのだが変化を与え、着装すると柔かな drapery をとどめさせる。

3) アバーヤの前の裏は(図 4.)であり、(図 5.)はアバーヤの後ろの裏側である。裏腰布は外側裾と内側裾と二重になり、着丈の調節を計っている。裏腰布のミシンの縫目には妙味があり、裏腰布一部三重の布の重さで美しい drapery をえがき出している。また裏前端的の閉止をしている所の左右の身ごろは、村の人々は一寸した物入れにも利用している。しかし街の若い人は利用していないと言う。

4) (図 6.)はチャラガットで、婦人のかぶる head kerchief 風で、ふろしきのような黒の頭巾である。

5) (図 7.)フータはベールの一種で、2枚の黒布地を黒の飾縫糸を用いて、フェザーステッチで veining したもので、両端は 0.7 cm の巻縫をしている。



## 6. 着 装 法

(1) チャラガット…布を三角形に折り、対角線の中央を額にもってきて、後頭部にまわして交差させ、(写真3.) 左右から前額部にまわし、前で1回結びまたは、こま結びに締め(写真4.) 三角の端布を両端にはさみこむ。額には lily yarn が垂れ下がる。

(2) フータは左耳下側より、頭上にまわし右耳を覆い、あごの下をまわし(写真5.)、左肩から後頭部にそって右耳で布端を二つ折にし、(写真6.)、右頬側にさしこむ。(写真7., 8.) フェザーステッチしている模様が前胸部に横線になって現われてくる。フータは左まわりして着装してもよい。

(3) チャラガットとフータをまとい、アバーヤを着装する。(写真9.) チャラガットとフータは砂嵐を防ぎ、また髪と耳を隠し頸を覆うために用いるものである。顔面を出すアバーヤ姿は、(写真10.) マホメットの掟通りの着装である。アバーヤの下には欧風のワンピースドレス、ブラウスとスカート、またはパンタロンを着用している。アバーヤ姿で羊を追ひ、農耕を行なうには、出来るだけ活動的で且つ身体を保護し、あまり変らないそして機能的で、単純な衣服を必要とする。アバーヤを着用して頭の上に野菜籠を載せたり、肩にかついだりするたくましさに、袖口が活用され、袖口があるのが、イラクのアバーヤ全身包被の特徴である。中近東のなかでも、イラクは自由な雰囲気着用され、街ではアバーヤを着ない人もみられ、どちらかと云えば冬季より夏季に多く着装される。チャラガットとフータをまとう若い人は少なくなったと言う。アバーヤ、チャラガット、フータは何れもアラビックである。写真のチャラガット、フータは、理解しやすくするため柄模様を使用している。

## 7. 仕 立 方

(1) 前端、袖口は1 cmの三つ折に、0.8 cmの飾りミシンをかける。

(2) 上下の布を縫合する。裏腰布に3乃至4本のカーブ縫目のミシンをかける。

(3) 肩縫い合せは、耳縫い2 cmを裏側に折り、前後の肩を合わせ表より0.8 cmの飾りミシンを1本かける。

(4) 当布付けは当布の周囲の縫い1 cmを裏側に折り、後衿肩明きにつけて地縫する。

(5) 縁飾りは洋角型0.4 cmコードのまつり縫いか、縁飾り糸でアウトライン・ステッチを往復重ね刺しをする。地縫ミシンの縫い目は、何れも0.5 cmである。村

ではミシンを持つ家庭は少ない。仕立を依頼した家庭では、足踏式(SMILE)中国製のものらしい。アバーヤは装飾化せず、実用的な衣服であり腰布のカーブ線を除けば、縫製は簡単である。

## V. 総 括

イラク国の重層化した歴史、複雑な民族の交流史と、イスラム教の戒律、暑熱乾燥の地域住民等の異なる生活様式の交錯など、安易な理解を妨げる要因が、イラクの現在の生活の背景にひそんでいる。自然とたちむかい、人工の混在を容認し、今もそのまま生き続けているイラクの人々の底深い強靱さを考え合わせると、石油資源の富と教育の普及、生活水準の向上と近代化する社会に、イラク国はまた世界のどこにも見られない型の近代化を、いずれの日にかなし遂げるのではないかと、政治体制の違いを越えて、期待をよせざるにはいられない。街や村に真黒なアバーヤを着装して、控え目に慎しみ深い物腰と、着馴れた姿は、イラク独特の民族服飾として伝統の保持を支えていたい。また近代化の促進にあい社会が急速な変化をみせ、女性の地位は外部のかつてない幅広い接触と為政者の働きかけにより、長い年月にはアバーヤも変容し、消滅して行く運命をたどるかも知れない。イラクの婦人の用いるアバーヤは、イスラム教の戒律を示し、その服装が宗教的意味をもつ典型的なものであり、また乾熱酷暑の気候と風土に順応し、身体保護の防暑となるアバーヤは、イスラム教徒として人体隠蔽の目的を果たすことができるわけで、色や柄でなく真黒なアバーヤの中央を頭からかぶり、覆面せず顔面だけ現わし、足もとまで全身包被し両手で包む形に着装する形態は、平面的構成をもち装飾化せず、単純にして質素で実用的である。イスラム文化圏の全身隠蔽の一系譜であるアバーヤには、袖口があり、前後腰布の上下縫合線は着丈を調節し、古代服飾のdraperyをとどめる妙味と、裏腰布のミシンの縫目などを加えて特異な技法であった。

本論文を執筆するに際し、文化女子大学名誉教授小川安朗先生、現地に関する有益な、ご助言を頂いた方、アバーヤその他イラク民族服飾資料を提供頂きましたご夫妻、モスLEMの方ならびに、服飾材料を鑑別頂いた山陽学園短期大学教授田辺健一諸氏の御協力に深く感謝申し上げます。

本論文は1979年10月、日本家政学会民族服飾研究  
部会総会において発表を行なったものである。

## 文 献

- 1) 小川安朗：民族服飾の生態 東京書籍株式会社（1979年）
- 2) 小川安朗：民族服飾の体系 衣生活研究会（1979年）
- 3) 片倉もところ、佐藤信行、青柳清孝：文化人類学、遊牧、農耕、都市 八千代出版（1979年）
- 4) 片倉もところ：アラビア・ノート アラブの原像を求めて 日本放送出版協会（1980年）
- 5) 梅棹忠夫その他：世界の民族 15. 中央アジア・西アジア 平凡社（1979年）
- 6) 梅棹忠夫その他：世界の民族 17. アラブ世界 平凡社（1979年）
- 7) 木原、田上その他：世界の旅 16. 北アフリカ・中近東 教育図書出版山田書院
- 8) 並河萬理：シルクロード、砂に埋れた遺産 新人物往来社（1974年）
- 9) 小堀 巖：砂漠に遺された乾燥の世界 日本放送出版協会（1976年）
- 10) 岩村 忍：シルクロード—東西文化の溶炉 日本放送出版協会（1978年）
- 11) 蒲生礼一：イスラーム 岩波新書（1976年）
- 12) 甲斐静馬：中近東 岩波新書（1974年）
- 13) 斉木幸子、加藤九弥：シルクロード 人と出逢う旅 （1976年）
- 14) 松田壽男その他：シルクロードⅡ、イラン、イラク、シリア、トルコ、山と溪谷社（1973年）
- 15) 木曾山かね：服装造形のためのデザイン 同文書院（1974年）
- 16) 道明新兵衛：ひも 学生社（1973年）
- 17) 石井、大塚、大野、水野上：被服学概説 建帛社（1978年）

昭和55年3月31日受理

## SUMMARY

Drawing and cutting pattern with sewing method of aba, the national costume of Iraq, was revealed and the literature on the mode of vicissitude of aba was surveyed.

The full-sized material as a sample of aba was obtained through an inhabitant in Iraq and a series of illustrative photograph for fitting and dressing of aba was available via the same root.

The following findings were elicited;

1) Aba is a mantle of full length in wide shape and adjustment for the body is made by means of a draw-string which runs through the stretched tuckle around waist-line. Drapery as a mode of ancient time remains in dressing-up.

2) Drawing and cutting pattern of aba is plane and each seaming line is straight. Aba is able to cover the whole body except for the part of face. This mode of body-coverage is a modification of chado in Islam cultural area.